

紀要の発刊にあたって

新潟県立看護短期大学

学 長 斎 藤 秀 晃

本学の開学は平成6年（1994）4月1日である。その前に準備期間3年を要しているが、準備に最も困難であったことのひとつとしては、有資格の専門教員の確保であったと思う。この場合の有資格者とは文部省令の短期大学設置規準に定められた資格をもっている者ということであるが、以下に述べる情況より他学部の教員を求めるより難しいと言えよう。

近年の社会は高令者の増加の反面、少子化という不均衡の人口問題から種々の問題がもち上がってきて、保健・福祉を最重点施策とする社会を迎えた。このため、看護や福祉に関しての高度の教育機関が求められるようになった。本県での看護系短期大学は、昭和49年に新潟大学に併設されたのみであった。ここ数年の間に全国各地において、看護大学や短大の急増は、まさに社会的ニーズの反映と言っても過言ではあるまい。従って、これら大学に招かれる看護学の専門家や研究者は先述の設置規準に定められた資格を満たす者でなければならない、となると極めて限られてくる。本県ではこのような専門家の育成が、残念ながら立ち遅れていたことを認めざるを得ない。全国的にみても、看護学専攻の学者の育成が成熟しないうちに、大学や短大が各地に設置され、現在の看護系大学は40、短大110となり、今後も増加の傾向にある。

このような時代の流れを背負って私どもの短大が誕生したのであるが、今後はじっくり立派な大学を構築し、社会に貢献できる看護者を送り出すために努力しなければならない。医療も時代とともに疾病の種類も多彩となり、医療機器や薬品も多様化しており、私どもの学生教育や研究も常に前進していくだろう。とは言っても、私どもの短大はスタートして1年を経たばかりであり、時代の子である現代学生の教育に多少の戸惑いを覚えながら経過してゆく時間の中で、大学教員としての自覚を新たにし、研究にも消ゆることなき情熱を燃やし、研究者としての職責を果たさねばならない。立派な研究の持続は、教育にも充分に反映してゆくものと私は信じている。

約30年間、私は医学部に在籍して、三人の恩師に師事したが、この三人の恩師に共通するものは、すぐれた頭脳のもち主であることは当然であるが、研究面では自らにきびしく孤独に耐え、継続性をもっておられた。一方、弟子の教育にはきびしさと優しさを両立させ得ることをお示しになられた。今は亡き三人の恩師を懐かしく思い自戒を禁じえない。

茲に発刊する紀要は、本学の教員による研究報告集録である。開学1年で多忙を極め、十分な研究の時間をとれなかったと考えるが、ともかく、前向きな姿勢で発刊に漕ぎつけたという感じである。今後2～3年は忙しさが続くと思うが、さらに研究を発展させて、わが国と本県の医療の向上と看護界の期待に応えたい。